

## 『宇宙とは何か』

松原隆彦 著 SB新書 990円(税込)

### 日常を離れ、壮大な宇宙に思いを馳せる

会員 草木 良文 (69期)



我々弁護士の日常は、極めて「人間的」な事象の積み重ねである。法律という厳格な枠組みを用いながら、依頼人の切実な願いや社会の複雑な課題に向き合い、一つひとつの事案に最適解を見出していく。それは知的で社会的に意義のある営みであるが、特定の案件について深く考える日々の中で、ふと視点を大きく切り替えたいくなる瞬間があるのではないだろうか。そんなとき、この世界の究極の仕組みを提示してくれる本書を手取ることは、最良の知的リフレッシュとなる。

本書『宇宙とは何か』は、宇宙論の専門家である松原隆彦教授が、最新の科学的知見を背景に「この世界はいったい何なのか」という根源的な問いについて解説した一冊である。新書という親しみやすい形式ながら、その内容は地動説から始まり、一般相対性理論、量子力学、さらには「マルチバース（多宇宙）」や「人間原理」といった、現代物理学の最前線までを鮮やかに俯瞰していく。

本書の特徴は、数式を用いず、難解な宇宙や物理の問題を専門知識のない者にも理解できるよう説明されている点にある。「夜空はなぜ暗いのか」という素朴な疑問が、宇宙に始まりがあることの証明に繋がっていくプロセスや、ミクロの量子の世界など、法律の世界とはまた異なる「自然界の摂理」が論理的でありながら平易な表現で綴られている。

なかでも興味深いのは、第五講で語られる「微調整問題」である。この宇宙の物理定数（重力の強さや光の速度など）は、あたかも生命が誕生するために精密

に調整されているかのようであるという。もし定数が僅かでも異なれば、星も原子も、そして我々人類も存在し得なかった。なぜ宇宙がこれほど絶妙な条件で存在しているのか。その謎に迫る筋道は、限られた情報から丹念に答えを探る日々の業務の進め方と重なる部分があり、思わず引き込まれる。

また、現代の科学をもってしても、宇宙の約95%は正体不明の「ダークマター（暗黒物質）」や「ダークエネルギー」で占められているという事実にも驚かされる。我々が知っている星や銀河、そして自分たちの身体を作っている「目に見える物質」は、宇宙全体のわずか5%に過ぎない。この圧倒的な「未知」の領域が宇宙を支配しているという視点に触れると、目の前の問題に注いでいた意識が、より大きな次元へと解放されるのを感じる。正解が一つとは限らない広大な世界を想像することは、凝り固まった思考を心地よく解きほぐしてくれるはずだ。

そして巨大な宇宙に思いを馳せた後に日常に戻ると、私たちが日々の生活で守ろうとしているルールや権利、そして人間同士の営みが、いかに稀有で貴重なものであるかということに気付かされる。

仕事や生活の合間に、ふと夜空を見上げるような気持ちで本書を開いてみてほしい。宇宙の彼方や、原子よりも小さな世界へと意識を広げることで、いつもの景色が少し違って見えるはずだ。専門的なバックグラウンドを問わず、誰もが「世界の美しさ」を再発見できる、宇宙論の入門書である。